

夢の鎌

結城 文

夢を重ねながら

日々は雲のように消える

果てしもなくひろがつてゆく夢の先端を

誰か見知らぬものの手が握っている

絶えず滅びてゆくものに取り巻かれながら

ひとひと日を生きて

雨上がりの野の

遠い虹を見上げながら歩く

内部のどうしても動かない部分は魂と呼ぼう

すべては永遠なるものひと刻み

空が静かに傾いて

夜がふくらむ

ただ一樹

野にたつ榛の木の上

鎌のような三日月がしだいに鋭さを増してゆく

いつになったら季節はめぐってくるのだろうか

生の花はどこかでひらいていたのだろうか

私自身のどうしようもなさの鎌で

夢を刈る

夢の化石の日々を刈る

三日月の鎌で